

HT29086 プログラム名 本を残す 本を伝える～古典資料の保存・修復・活用～



開催日：平成29年7月17日(月・祝)

実施機関：一橋大学

(実施場所) (一橋大学社会科学古典資料センター)

実施代表者：屋敷二郎

(所属・職名) (一橋大学社会科学古典資料センター・教授)

受講生：中学生1名・高校生9名

関連URL：<http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/hirameki.html>

【実施内容】

・プログラムを留意・工夫した点

今回のプログラムでは、新たに実施代表者によるブックトークの時間を設けた。教材となる図書は、受講者が親しみもちやすいように、高校生以上の読者を念頭に執筆された、世界史の教科書にも出てくる人物の評伝を選定した。また実施にあたっては、実施代表者の個人研究室で行うことで、受講者との距離を近くし、学術研究の現場に触れる機会となるよう工夫した。また昨年度までのプログラムと同様に、受講者が実際に手を動かして活動できるように、修復工房での保存箱作成およびページ修理実習を実施した。さらに、これらのプログラムを実施するにあたっては、全体を2つのグループに分け、午前はブックトークと書庫見学、午後は保存箱作成と修理実習にそれぞれ交代制で参加するように工夫し、一人一人の受講者が実施代表者と近しく接したり工房の技術補佐員からきめ細かな指導を受けたりできるように留意した。

実施にあたっては、本に囲まれた環境を体感できるよう、図書室(社会科学古典資料センター)を主会場とし、実施代表者の個人研究室を副会場とした。普段は立ち入れない貴重書庫内で西洋社会科学古典籍の紹介を行うことで、大学の専門図書館のアカデミックな雰囲気を感じてもらおうとともに、保存環境維持のためどのような配慮をしているか実際に見学できるようにした。合わせて個人研究室で実際に執筆に使われた資料に手に取りながらブックトークを行うことで、収集され保存された資料が実際に活用される現場も体感してもらい、中学校・高等学校の授業・学習内容と大学での最先端の研究と古典資料の収集・保存とが一本の線で結ばれていることが実感できるように工夫した。実習では社会科学古典資料センターに附設されている保存修復工房において資料保存の理念と実際を实地に体験できるようにした。実演・実習指導には、普段から保存活動に携わっている工房職員に活躍してもらった。

教材については、平成28年度に作成したパンフレットに加えて、実施代表者の著書『フリードリヒ大王—祖国と寛容』を事前に配布し、予習だけでなく後日の復習にも役立ててもらえるようにした。

実習で作成したノートと保存容器を記念に持ち帰ってもらった。ノートの表紙はマーブル紙と羊皮紙で作成した。また修了証は、資料保存用に用いられる特殊な中性紙で作成した。

・当日のスケジュール

9:00 受付開始(社会科学古典資料センター集合)～9:30 開講式(センター長挨拶)～9:40 オリエンテーション・グループ分け～10:00 午前プログラム前半(グループA=屋敷研究室でブックトーク、グループB=閲覧コーナー展示資料説明・センター書庫貴重書見学)～10:50 休憩・移動～11:00 午前プログラム後半(グループA=閲覧コーナー展示資料説明・センター書庫貴重書見学、グループB=屋敷研究室でブックトーク)～

11:50 移動～12:00 受講者と一緒に昼食～13:00 午後プログラム前半(グループ A=修復工房見学・道具の説明・保存箱の作成、グループ B=ページ修理とノートづくり)～14:20 休憩～14:30～15:50 午後プログラム後半(グループ A =ページ修理とノートづくり、グループ B =修復工房見学・道具の説明・保存箱の作成)～15:50 休憩～16:00 修了式(ブックマイスター号授与、アンケート記入)～16:20 解散

・実施の様子



・事務局との協力体制

日本学術振興会との折衝、会計管理、学内事務手続等につき学内の各部署の協力をえた。学術・図書部の課長代理(総務担当)を中心に事前の広報活動への支援を受けた。

・広報活動

社会科学古典資料センターのサイトに募集案内を掲載して周知を図るなど、積極的な広報を行った。結果として、昨年度までよりも短い募集期間であったにもかかわらず、87名の応募があった。

・安全配慮

学外者であっても学内の事故については大学で加入している保険でカバーされるため、別段の保険はかけなかった。事故防止のため、実施代表者、分担者が全体を通じて気を配るとともに、1対1に近い割合で実施協力者を配置した。

・今後の発展性、課題

大学図書館による古典籍の収集は原典による研究という学問的理由に基づいている。一橋大学で収集しているのは、とりわけ社会科学関連の資料であり、当該分野についての専門的知識が求められる。しかし、収集された資料の保存は、紙の劣化のメカニズムや食害をもたらす昆虫やカビについての知識など化学や生物学などを含む自然科学的な広範な視点を必要としている。資料の活用と保存にとって必要なのは、理系や文系といった単純な区別に縛られない、視野の広さだと言える。

その一方で、保存活動において必要なのは、単なる知識に止まらない「手仕事の感覚」と呼ぶべきものである。このことは究極的にはあらゆる人間の営為に共通するであろう。現代社会において、我々はヴァーチャルな電子的情報に囲まれて日々生活しているが、そうした情報の根源的なところには常に何らかの実体が存在するのであり、その実体となるものと人間との関わりは常に手仕事の感覚のようなものが出発点として存在している。その感覚は、知識を空疎なものにとどまらせない「実学」の根幹をなすものである。

本プログラムの主題は、大学図書館における資料の活用と保存の実際であり、また、以上に述べたような、あらゆる学問の基礎にある知的探究心の核となるものであった。特に、初めての試みであった研究室でのブックトークでは、受講者を2グループに分けてさらに距離を近づけ、実際に原典資料に触れて声に出して読み上げてもらうことで、中学校・高等学校の授業で扱われる事柄が単なる文字の羅列ではなく、一つ一つが学問的営為の裏付けを持っていることを改めて実感してもらえた。今後も受講者の関心を掻き立てるような企画となるよう工夫を凝らしたいと考えている。

【実施分担者】

山部 俊文	社会科学古典資料センター・センター長／大学院法学研究科・教授
福島 知己	社会科学古典資料センター・助手
床井 啓太郎	社会科学古典資料センター・助手

【実施協力者】 8 名

【事務担当者】

小松 孝彰 総務部 研究・社会連携課 課長代理